

平成29年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 茨城県 】

1 実践テーマ	【 I・III・V 】
2 実施対象者	東海村立東海南中学校 全校生徒
3 展開の形式	<p>(1) 学校における活動</p> <p>① 教科名 (保健体育)</p> <p>2 行事名 ()</p> <p>③ その他 (休み時間及び体育館使用时)</p> <p>(2) 地域における活動</p> <p>1 イベント名 ()</p> <p>2 その他 ()</p>
4 目標 (ねらい)	<ul style="list-style-type: none"> ・パラリンピックの競技体験を通して、未体験スポーツへの興味関心を高めると共に、障がいを個性として捉え共生社会への意識の向上を図る。 ・各種競技の世界記録等を知ったり、体感したりすることで、スポーツやオリンピックへの知識や興味関心を高める。
5 取組内容	<p>(1)パラリンピック競技体験（第1学年対象）</p> <p>○パラリンピックの競技体験を通して、競技の特性や楽しさを体感すると共に、障がいのある選手の努力や苦労を理解する。</p> <p>①「ボッチャ」体験</p> <p>ボッチャは、目標球（ジャックボール：白いボール）に赤ボール・青ボールをそれぞれ6球ずつ投げ、いかに近づけるかを競うスポーツである。カーリングのように、相手のボールを弾いたりして自分が優位に立てるような位置取りをしていくが、目標球を弾いて移動することもできる。そのため、戦略を立てることに魅力がある競技である。</p> <p>生徒には、実践しながら簡単なルールと投げ方の説明を行った。実際に競技をしながら説明したので、その後の競技体験（ゲーム形式）はスムーズに行うことができた。用具の関係上、団体戦形式（1チーム6～8名）で実践した。</p> <p>始めは、投げるだけの簡単な競技だろうと感じていた生徒が、ボールの重さや堅さ（あまり弾まない）に戸惑い、苦労していた。また、目標球に近づけるように投げる感覚と距離感は、これまであまり経験がなく難しかったようで、腕や指先の感覚が重要なことを実感していた。これを、障がいのある選手が行うことの努力や苦労は、並大抵のものではないことを感じていた。</p> <p>運動が得意な生徒、苦手な生徒といるが、ボッチャは誰もができるスポーツなので、体験を進めていくと難しさの中にも楽しさを感じられるようになってきた。また、団体戦ということもあり、チームで一人ひとりに声をかけたり、1球1球に歓声やため息をついたりしている様子からも、</p>

生徒が夢中になっていることが感じられた（写真1）。

体験活動の後半（3試合目）には、戦略を話し合う様子が見られた。「1番目の投球者はコントロールの良い人が投げよう」「目標球が一番近くにボールが行ったら、次の人からは相手のボールをブロックするように投げよう」など、様々な戦略が話されていた。また、相手のボールの位置を確認して、戦略を考えながらボールを投げる位置を指示する生徒も自然に出てきた。（写真2）。投げ方に関しても転がすだけでなく、転がらないように上から落とす投げ方、ボールに逆回転をかける投げ方、相手のボールを弾く投げ方など工夫が見られ、ゲームをする楽しさから、ボッチャの特性・面白さを味わう様子が見られた。

授業後に、「次はいつやるんですか」という声が聞かれ、興味関心の高まりが感じられた。



（写真1：ボッチャ
団体戦の様子）



（写真2：戦略を指示する生徒）



（写真3：シッティングバレーボール）

②「シッティングバレーボール」体験

シッティングバレーボールは、臀部を床に付いた状態で、座った姿勢でプレーするバレーボールである。

球技「バレーボール」の単元時に、体験活動を行った。ボッチャと同様に、実演しながらルールの説明を行ったことで、体験活動はスムーズに行うことができた。体験の後半からは各グループで、「足は横に置いた方が動きやすいよ」とか「ボールは高めにレシーブしよう」など、運動のポイントを探し始めるようになってきた（写真3）。

しかし、1年生ということでバレーボールの基礎・基本の技術が低く、かなり難しかったようである。また、この体験をすることで座りながら移動したりレシーブやトスをしたりする筋力の強さ、瞬発力の必要性には驚いた様子であった。

③「ボッチャ」「シッティングバレーボール」の感想

各種目の体験後には、感想を記入した（写真4）。生徒たちの感想からは、初めてやったスポーツの楽しさや難しさ、障がいのある選手の努力や苦勞など、様々な視点をもって体験活動を行っていたことがうかがえた。

<感想の紹介>

- ・誰でも参加できるスポーツでやっていて楽しかったです。
- ・投げ方や戦略を考えて対戦するのが楽しかった。
- ・シティングバレーボールは、足が使えないのでかなり難しかった。普段何気なく立ったり歩いたりしているが、それができないのは大変だと感じました。
- ・体が不自由でも、何か頑張っている人は、輝いているなと思った。
- ・障がいのある人も私たちと同じスポーツができるということは、とても良いことだと思いました。こういったスポーツがもっと増えれば良いなと思っています。
- ・体が不自由な人でも、運動を楽しむことができることを知れた。
- ・この競技体験を通して、体の不自由な人の気持ちを考える事ができました。
- ・このスポーツを体験して、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに関心をもった。
- ・もっとパラリンピックの競技を体験したいと思った。
- ・こういった種目で、世界で活躍している人がいるのは凄いと思った。



(写真 4:感想用紙の記入)

(2) オリンピックを知る (全校生徒対象)

○ 各種競技の世界記録等を知ったり、体感したりすることで、スポーツやオリンピックへの知識や興味関心を高める。

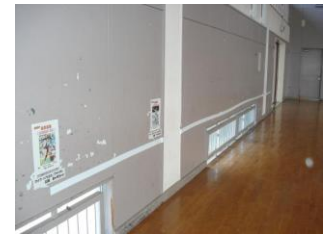
オリンピックに関心をもってもらうために、体感できる掲示物を作成して体育館に掲示した。

掲示物は、現在の「走り高跳びの世界記録 (男子・女子)」・「走り高跳びの世界記録 (男子・女子)」を実際の「高さ」と「長さ」を取って作成した (写真5・6)。生徒たちは、実際の「高さ」と「長さ」を体感することで、「こんなに高いの!」「こんなに跳ぶの!」という声をあげていた。また、自分の身長と比べたり、実際にジャンプしたりと驚いた様子を見せていた。


オリンピックの競技を見る上で、テレビや映像だけで目にするものと、実際に体感したことがあって目にするものでは、興味関心が違ってくるであろう。さらに、その競技を見てみたい、やってみたいという意識に変わってくると考える。



(写真 5: 走り高跳びの掲示)



(写真6：走り幅跳びの掲示)

	 <p>(写真6：走り幅跳びの掲示)</p>
<p>6 主な成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> パラリンピック競技（「ボッチャ」・「シッティングバレーボール」）の体験を通して、初めてやるスポーツの特性や楽しさを味わうことができた。特に、戦略を考えて攻防することの楽しさを感じることができ、他の競技にも活用してもらいたい。また、障がいのある人の苦勞や努力を体感でき、共生社会への意識の向上が図られた。 2020年の東京オリンピック・パラリンピックへの関心も高められ、オリンピック・パラリンピックの見方、考え方もよい方向へ変わった。
<p>7 実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p>「体験・体感」を柱として考え、事業実践を行った。実際に体を使ったり見たりすることで、驚きや親近感という心に響くものを感じさせたかった。そこから、オリンピック・パラリンピックへの意識を向上させるように取り組んだ。</p>
<p>8 主な課題等</p>	<p>パラリンピック競技の体験では、用具を揃えるのが大変だと思う（費用面で）。代用できるものがあればよいのだが。また、競技によっては、やってすぐにできるものと、そうでないものがあるので、生徒の実態に即して選択する必要がある。</p>
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<p>今年度に、ボッチャの用具を3セット揃えることができたので、単元の間やレクリエーション（クラス・親子）で活用できればと考えている（あと数セット必要、もしくは何かで代用）。</p> <p>世界記録の掲示は、他の種目で掲示できればと考える。</p>